

## 後記

伊藤駿二郎先生の『戦争体験から思うこと』を読み、イーゼル無くして画布無しを改めて痛感した。近代史を俯瞰すると、おそらく母国では、団塊の世代から平和が当り前の時代になったのだ。自由と平和という単語を並立しても、平和という海無くして自由という魚は生存できない。

峯雲先生へは、この三カ月間『ご寛恕願いたい』と謝っている。すなわち思い出話でも書いてよという軽い依頼のため、原稿を書く人たちは思い出話ね、OKよ、ということに相成り、途中からの変更で混乱が生じた。芭蕉先生の寛大な『軽み』に免じて、まずは第一号を発刊することが目標達成としてもらった。水源地という源泉から水が流れるように、これからは自然にいろいろな人がいろいろに書いてくれるでしょう。第二号の発刊はさらに時間がありますから。さてさて、嬉しいことは、小生が想像していたとおりだった事だ。編集作業が始まるとは、普段の生活のほかに、もうひとつの新生活が始まると予想していたが、やはり正解であった。夏彦翁ではないが一言で言え、一言で、となると『妾宅ができた』ということか。毎日毎日が編集メールで行っ

たり来たり。楽しかった。

人との出会いとは不思議なものだ。永眠した人がずっと生きている。

入学式のとき、同時に赴任してきたばかりの深水明美先生は美人かなと思っていたら、満州帰りの男侍だった。四年生の先輩が必修科目を長期欠席していて、卒業／就職大丈夫かいな、と案じていたら、午後五時ごろ銭湯の出入口に仁王立ちしている男がいた。そとは吹雪、吹雪、氷の世界。いい気持で出てきた先輩は石鹸と手拭いを空に放り投げた。その男は先生だった。漱石『坊ちゃん』は生きていた。(粕谷)

『水源地』発行とブーチン訪日と同じ十二月に藤原書店から『東京を愛したスパイ一九〇七〜一九八五』が刊行される。以下、同社作成の広告文から。「サンポの創始者オシエプロフ、ソ連の探偵小説の先駆者ロマン・キム、そしてゾルゲ……。二十世紀前半の東京を跋扈した、個性溢れるロシア／ソ連の諜報員たち。情報公開(グラスノスチ)による最新の資料を駆使して、高度に知的な彼らの実像と、その東京での足跡を辿り直した異色のドキュメント」。著者はモスクワ在住の新進気鋭の日本学者クラノフ氏。拙訳、です。(村野)

回顧録は、その人が何をして来たか、そして過去に、何を考えていたかを述べているだけだ。そこには、今がない。明日がない。

「水源地」は、今何を考え、今何をしているのか、また明日何をしようとしているのか、今作品として何をみんなに紹介したのかを出身経歴とは関係が無く、ただ親しくしている人に投稿してもらい、読んでもらい、考えてもらい、よりいつそう懇親を深めよう。それが「水源地」発行の本来的主旨である。文章とは不思議なものだ。その人の日頃の生活の在り方や考えが、かいま見えて来る。思い出に浸るだけなのか、明日への糧に何かを表現しようとしているのか、何かを訴えようとしているのか。

投稿文とは、交換日記や手紙とは違う。自分や自分の過去や自分の仲間を知らない人も読むのだ。となれば、クラス会や同窓会での仲間内にしか分からない話題とは違う。日頃考えているテーマや自らの主張や今取り組んでいることなど、誰が読んでも理解できることが条件となる。もちろん、ジャンルなど問うことはない。ご家庭の得意料理の紹介もまさにその人の作品である。願わくは、次回の投稿が友人たちの今を生きる、いや明日を生きる姿を反映したものであることを祈る。(横山)